

釧路湿原 自然再生シンポジウム

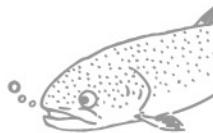
ニュースレター

《開・催・報・告》

平成19年2月23日(金)、釧路キャッスルホテル「平安の間」で、釧路湿原自然再生協議会の主催による『釧路湿原自然再生シンポジウム』が開催されました。自然再生の意義や取組みの現状、今後の展望などについて基調講演や取組み報告会、パネルディスカッションが行われ、約300名の参加者は自然再生事業についての共通認識を深めました。なお、文面は参加者の発言をもとに運営事務局がとりまとめました。

13:00 挨拶 釧路湿原自然再生協議会会長 辻井 達一

基調講演



I.「世界で進展する自然再生」

..... 釧路湿原塾長 月尾 嘉男

II.「コウノトリとともに生きる～豊岡の挑戦～」

..... 兵庫県豊岡市長 中貝 宗治

※月尾嘉男先生は、当日の悪天候による飛行機欠航のため、御欠席となりました。

14:20

取組み報告会

私たちにとって、地球にとって、
釧路湿原はかけがえのない財産。
自然環境について研究を
続けている方、自然再生に取り組んでいる方の話に耳を傾け、
釧路湿原の望ましい未来について意見を交換し、互いの共感を育むシンポジウムです。

- 特定非営利活動法人 釧路湿原やちの会 雜賀 重二
「釧路湿原から環境問題を発信する」
- 特定非営利活動法人 トラストサルン釧路 杉沢 拓男
「森林再生と釧路湿原」
- 釧路自然保護協会 針生 勤
「釧路湿原の保全に向けたこれまでの取組み」
- 太平洋総合コンサルタント(株) 川尻 洋志
「釧路湿原に関する環境教育」



釧路湿原の魅力や可能性、
そして自然を再生することの大切さを知り、
語り合うために、
地球の未来を想像しましょう。

15:20 休憩



15:30 パネルディスカッション

- ◎コーディネーター:辻井会長
- ◎パネラー:基調講演者2名、取組み報告者4名



16:30 終了

開会挨拶



辻井 達一 氏
釧路湿原自然再生
協議会会長

1931年東京都生まれ。北海道大学大学院農学研究科修了。北海道大学農学部付属植物園長、同大農学部教授、北星学園大学教授を経て1997年より(財)北海道環境財団理事長、2004年よりNPO法人日本国際湿地保全連合会長を務める。

現在、釧路湿原自然再生協議会の議論をもとに、釧路湿原の自然再生事業が進行中です。できるだけ、市民の方々にわかりやすく、なおかつ広範にPRする機会をつくりたいと考え、本日のシンポジウムを企画しました。

残念ながら、月尾先生が季節外れの濃霧で飛行機が欠航となり、お出でいただけなくなりました。しかし、タンチョウと並ぶ我が国を代表する自然保護の事例であるコウノトリの保護について、豊岡市の中貝市長から貴重なお話を聴くことができると思います。また長年、地元で活動されている方々の取組み報告やパネルディスカッションも企画しています。本日のシンポジウムを契機として、自然再生の取組みが広く普及し、さらに進展することを希望しています。

基調講演

概要 (1/2)

コウノトリとともに生きる — 豊岡の挑戦 —



■ 恵み豊かな土地だが、絶滅の辛い歴史も経験

豊岡市は兵庫県北部の日本海に面したまち。市内を流れる円山川は勾配が極めて緩やかで、河口から10km上流でも海の魚であるカレイやアジが釣れる。それだけ海水が遡上してくるからである。風がない時は鏡のように穏やかな水面だが、これは、水はけの悪さと裏表の関係にある。ひとたび大雨が降ると水が滞留し、円山川は氾濫を繰り返してきた。平成16年台風23号では、大変な水害に見舞われた。

他方で、低湿地は恵みもたらしてくれた。湿地に群生したコリヤナギという植物を用いて柳行李(やなぎごうり)の生産がなされ、これを起源として、今では日本有数のカバンの産地となっている。

コウノトリもまた低湿地を代表する鳥である。湿地には、餌となるカエルやドジョウ、フナなどが豊富にいて、かつてたくさんのコウノトリが生息していた。しかし、明治期の狩猟による乱獲、第二次世界大戦中の松林伐採による営巣地の消滅、戦後の環境破壊などで急速に減少した。特に農薬の使用は致命的な影響を及ぼし、コウノトリは今から36年前の1971年に絶滅、日本の空から姿を消した。豊岡が最後の生息地だった。

■ 繁殖成功から始まった「コウノトリの郷」づくり

絶滅に先立つ'65年から人工飼育が始まられたが、その後24年間一度も孵化に成功せず暗中模索が続いた。転機は'85年に起きた。当時のソ連・ハバロフスク地方からコウノトリの幼鳥6羽が寄贈され、'89年に待望のヒナが誕生した。以来順調に数を増やし、現在123羽のコウノトリが豊岡に暮らしている。

野生での絶滅から36年、人工飼育の開始から42年、保護運動が明確な形をとったから52年。長い時間と膨大なエネルギー、たくさんのお金が必要だった。恐らくこれからもそうだろう。では、なぜそれほどまでして野生化に取り組むのか。狙いは3つある。

1. 「大空に帰す」というコウノトリとの約束を守る。
2. 野生生物の保護に関して世界的な貢献を果たす。
3. コウノトリも住める豊かな環境(自然環境と文化環境)を創造する。

こうしたねらいを実現するため、様々なことに取り組んできた。'99年、兵庫県は野生化の拠点となる「コウノトリの郷公園」を開園。翌2000年、市はその一角に普及啓発を担う「コウノトリ文化館」を設置した。



中貝 宗治 氏
兵庫県豊岡市長

1954年豊岡市生まれ。京都大学法学部卒業後、兵庫県職員、兵庫県議会議員を経て平成13年から現職。平成16年台風23号災害からの復旧・復興や、コウノトリとともに生きる環境の創造に向けた取組みなど幅広い活躍で知られる。

農業のあり方も変えていく必要がある。無農薬のアイガモ農法による米づくり。休耕田を利用した「ピオトープ水田」の設置。コウノトリの餌となるカエルを救うために冬も水田に水を張る「冬期湛水」の実施や、6月頃にいったん水を抜く「中干し」作業の延期。また、田と水路の生き物の循環を取り戻す「水田魚道」の設置にも取り組んだ。

城崎温泉近くの土地改良区では、工事を待つ休耕田にミズアオイの花が咲き、水鳥で賑わった。その景観を守るために、市が耕地の一部を買取し、「湿地公園」として整備することにした。国や県は、河川敷の堤外湿地を10年間で現在の約3倍、200haに増やす自然再生計画を進めている。

意識の醸成も大切なこと。市長公用車、民間のバス、飛行機にもコウノトリのマーキング。コウノトリのミュージカルもでき、ついには「ふるさと戦隊コウノトリレンジャー」なるものまで登場した(笑)。

'02年8月に小さな奇跡が起きた。1羽の野生コウノトリが飛来し、ピオトープ水田で餌を食べるなど、豊岡を生息地として認め、住み着いてくれたのである。そして、'05年9月24日、秋篠宮ご夫妻をお招きした「第3回コウノトリ未来・国際かいぎ」で、ついに人工飼育のコウノトリのうちの5羽を野に放った。放鳥はその後も行われ、自由の翼を得たコウノトリたちは、市内のあちこちを飛び回っている。かつてコウノトリが日常の生活に溶けこんでいた風景が、次第に戻りつつある。



■ 「環境経済戦略」を進め、着実に成果を上げる

そして今、次なる目標を「環境経済戦略」と定め、その推進に取り組んでいる。かつて環境と経済は対極の関係にあった。しかし、環境を良くすることで経済が潤い、経済が潤うことで環境を良くする活動がさらに広がる「環境と経済が共鳴する関係」を構築し得る。以下の3つを基本方針としている。

1. 経済の裏づけにより、環境行動自体に持続性を生み出す。
2. 「環境経済」による経済活性化で、地域の自立を支える。
3. 環境を良くしながら暮らしを成り立たせることを市民の「誇り」とする。

いくつかの例が見えはじめている。豊岡に本社と工場を置く太陽電池の製造会社は、「私たちの夢にふさわしい場所、それがコウノトリのいる豊岡です」をキャッチフレーズに国際的にアピールし、ヨーロッパを中心に大量に売れるようになった。現在設備投資を行い、大幅に生産能力を拡充している。世界中の人々が環境に配慮し、太陽電池を取り入れることで経済が活性化する。また、市内のプラスティック成型会社は、同じく市内の水産加工会社と協力し、ゴミ扱いされていたイワシの残渣を使ってドッグフードを製品化した。これも環境と経済の両立である。

自然界の法則を用い、害虫を他の虫が食べる「食物連鎖」を農薬に代える「コウノトリ育む農法」などの栽培技術も確立。安全・安心ブランドの認証制度も普及させている。これらの商品は、通常価格の最高2倍で流通されており、「環境創造型農法の方が、結局は得ですよ」と農家にアピールしている。環境創造型農法による作付面積は、今や市全体の約15%にまで達し、さらに広がりつつある。また、契約栽培による「コウノトリのお酒」、「コウノトリ舞う豊岡の大豆を使った豆腐」など、多様な広がりを見せている。

「コウノトリ・ツーリズム」も普及しつつある。JR西日本がキャンペーンを実施、JTBは豊岡への団体ツアーを企画し、好成績をあげた(社内で西日本最優秀賞受賞)。コウノトリ文化館の来館者は年間40万人を超え、現在、交流センター「コウノトリ本舗」をオープンさせるべく準備を進めている。コウノトリをシンボルマークとする「九州石油」のサポートや、城崎温泉街でのコウノトリ募金の取組みなど支援の輪も広がっている。大切なことは、2~3人のスーパースターが活動を引っ張るのではなく、市民一人ひとりが自分の立場で自主的に考え、行動に移すことだと思う。

■ 心が豊かだった60年代の世界が蘇る

'60年に撮影された一枚のモノクロ写真がある。農家の女性と7頭の但馬牛、12羽のコウノトリが、川の浅瀬で手を伸ばせば届くほどの距離に佇んでいる。その写真を使って、11年前に大きなポスターを作成した。「35年前、みんなで暮らしていた」という言葉を添えた。そして、「私たちは人間の努力を信じます」とも。

コウノトリ野生復帰の道のりを思うとき、いつも心に浮かぶ言葉がある。

「願うこと、願い続けること、投げ出さないこと」

この言葉を、釧路湿原の自然再生に取り組む会場の皆様に捧げたい。

● 豊岡市のプロフィール

豊岡市は、人口約92,000人(平成19年2月現在)、面積約700km²で、平成17年4月1日、兵庫県の北東部の1市5町(豊岡市・城崎町・竹野町・日高町・出石町・但東町)が合併してできたまち。約8割を森林が占め、北は日本海、東は京都府に接し、中央部には円山川が流れる。山陰海岸国立公園、氷ノ山後山那岐山国定公園など、豊かな自然環境に恵まれている。産業は、農林水産業、観光業などが盛んであり、カバンや出石焼などの産地としても知られる。

国指定の特別天然記念物・コウノトリ(翼長約2m、体重約5kg、国際自然保護連合「近絶滅種」指定)が自然放鳥され、人里で野生復帰をめざす「コウノトリの郷づくり」を進め、国際的にも注目を集めている。

■ 来場者との質疑応答

● 来場者 釧路では、電線事故でタンチョウの数が伸び悩んだ時期があり、北海道電力に黄色いマーカーをつけてもらった。豊岡では、そうした対策はどうなのか。

● 中貝 人工飼育したコウノトリは、電線や鉄塔など人工物が大好きな性格を持つ。ある程度の対策は関西電力の協力で進めているが、きりがないところもある。大らかに、あまり神経質にならないようにしている。

● 来場者 釧路の自然再生事業は、まだ「回答を書く」段階ではなく、「試験問題を整理している」状況で行政とぶつかっている。豊岡の場合、行政との共生型に転換したきっかけをお伺いしたい。

● 中貝 スタートは行政主導だが、市民に熱心な方が多く、ずっと未来を信じて頑張ってきた。私自身この活動に15年間携わってきたが、最終的な目標だけを見据えることは避け、「小さくてもいいから答えを出すこと」を心がけている。「形」が見え始めると、必ず仲間も増える。一步ずつ辛抱強く取り組むことが大切で、市民に対してもその時その時にできることをサポートしている。また「純粋になり過ぎないこと」も重要で、純粋すぎると少しでも不純なものを許せなくなり、自分の殻に閉じこもってしまうので気をつけたい。

とにかく、結果が出ないと自己嫌悪に陥ってしまう。何とか少しでも、具体的な「答え」や「形」を出すことで打開できるものと信じてやってきた。



取組み報告会

概要 (1/2)

■ 釧路湿原から環境問題を発信する

特定非営利活動法人 釧路湿原やちの会

雜賀 重二 氏



「やちの会」は1995年に発足し、'99年暮れに特定非営利活動法人となり、釧路湿原の環境保全に取り組んでいる。2005年には、北海道アウトドア協会認定の「アウトドアガイド」になった。

温根内の木道などを案内しながら、氷河期の遺存種キタサンショウウオや各種植物を紹介したり、ハンノキの分布拡大状況なども説明している。'47年から30年間は、湿原はあまり変化していなかったが、'04年を見ると最近の約30年間で湿原が大きく減少したことがわかる。こうした情報を観光客に説明し、現状に対する理解を深めてもらっている。

また、環境を良くするための「足長おじさん」という意識を持ち、湿原周辺の清掃活動などに力を入れている。

自然再生事業との関連では、自然との共生や環境問題など、どうやって来訪者にわかりやすく説明するか、いろいろ苦心し、工夫を重ねている。昨年は、東京弁護士会の依頼で自然再生事業の現地を案内した。地球温暖化との関係や、「1秒の世界」という本を参考にした砂漠化の速度など、いろいろな視点を取り入れながら、自分のこととして考えてもらうきっかけを提供している。

また昨年度の「全道川の日ワークショップ」での活動にかかわったり、タンチョウの生息調査、チルワツナイ地区での環境保全活動なども継続している。

■ 森林再生と釧路湿原

特定非営利活動法人 トラストサルン釧路

杉沢 拓男 氏



「トラストサルン釧路」は、市民自らの手で自然保護を成し遂げようと、ナショナルトラスト運動を進めている団体である。これまで、釧路湿原周辺で荒廃が進んだ土地を合計200ha取得し、森を含めた土地の管理・再生を進めるなど、口で言うだけではなく、行動することを大切にしている。

現在、国立公園に指定されていない湿原地域が4,000ha以上あるほか、天然記念物の動物が生息している地域でも国立公園やラムサール条約の地域から外れているところが少なくない。また湿原の水源となっている森林や河川についても、その現況について問い合わせる意識を持ちながら、活動を続ける必要がある。岩保木山頂から撮った写真を見てもわかるように、さまざまな形で湿原や周辺環境の荒廃が続いている。4年前から自然再生事業が始まり、「流域全体の視点」というテーマが議論されているものの、まだ具体的方策が見えてこない。

湿原周辺の丘陵地では森林破壊が進んでおり、これが湿原への土砂流入の最大要因だと認識し、くい止めるための森林再生を続けている。伐採された樹木の枝などをもらい受けた活用し、高齢者事業団の方々の協力も得ながら、崩壊した斜面の土留めを行ったり、荒廃した山の斜面での植林活動を続けている。その際、地域にもともと生えている樹木で森林が再生されるよう、「畑」をつくってその苗を育てている。ミズナラの丘陵地では、エゾシカが木の芽を食べてしまうなど、難しい問題も発生しているが、土留した斜面での植林では、大きな成果を上げている。

■ 釧路湿原の保全に向けたこれまでの取組み

釧路自然保護協会

針生 勤 氏



私たちの協会は1970年代初め、日本列島改造論が盛んになったころ、北海道教育大学教授だった田中瑞穂先生の呼びかけで「北海道自然保護協会・釧路支部」として発足した。

'72年の市民シンポジウムでは、釧路湿原の「国定公園化構想」を提起するなど、現在の国立公園化の先鞭をつける。この構想は、現在の国立公園よりもずっと広い地域を対象としていた。当時、釧路市立郷土博物館の総合調査が'71年から3年がかりで実施され、貴重な資料を収集した。これが、その後の「湿原保護3原則」の確立に大きく寄与する。

そして'76年、ラムサール条約への批准を要請する取り組みを始める。田中先生が、'77年に御逝去されたのは大変残念だが、'80年に登録を実現した。続く'81年には、協会として釧路湿原の国立公園化構想を発表する。この構想は'82年の釧路湿原特別委員会に提出され、地元を挙げた取り組みへ発展し、'87年の国立公園指定として結実していった。

'95年から「春採の森」づくりを進めると同時に、'98年からは湿原周辺で取得した6.3haの土地を利用してビオトープづくりを進める他、最近ではイトウの産卵調査を開始。次第に産卵環境が明らかになり、保護のためのデータが蓄積されつつある。田中先生の遺志を受け継いで、今日の釧路湿原自然再生協議会での活動をはじめ、30数年の活動が実を結びつつあるのを実感している。

■ 釧路湿原に関する環境教育

太平洋総合コンサルタント(株)

川尻 洋志 氏



私たちは、釧路を拠点に環境総合調査などを行う会社で、環境教育活動として標茶高校の活動をサポートしている。特に湿原植物を使った「水質浄化実験」では、地元企業のカムイエンジニアリングと連携して、植物の力で水がどの程度きれいになるかを温室で実験し、成果を上げている。

また学校からの要望に応え、釧路川を中心に水質調査と生物調査を行った。水質調査では、釧路川の水質データと、高校の敷地内にある牛舎糞尿のデータを比較して集計し、「六角グラフ」でわかりやすく表現した。

釧路川の生物調査は、ライフジャケットを着用し、採集した魚や水中生物などを水槽で観察し、最終的にリポートを作成した。自分の手で初めて魚をつかまえ、感動している生徒もいた。調査では目で見てわかる工夫に努め、生徒の関心を引きつけるように配慮している。

生徒の感想としては、約50%は面白かった、約30%は発見があったなど、全体の約8割が好意的評価だった。しかし残り20%の中には、「難しかった」という生徒もいたので、そうした子供たちの関心を引きつけるよう、工夫していく必要があると考える。今後も、子供たちが身近な川にふれ、楽しく調査する事で、自然への興味を持つ「きっかけ」となってくれるよう、自然の素晴らしさを多くの人々に伝えるお手伝いをしていただきたい。

パネルディスカッション

概要 (1/2)

◎コーディネーター：辻井会長
◎パネラー：基調講演者(中貝市長)
取組み報告者4名

●辻井 本日は、会場内に設けた釧路湿原の大きな航空写真の人気が高い。釧路湿原自然再生協議会として作成したものだが、湿原に親しんでもらう上で効果があると思う。琵琶湖博物館のように、釧路湿原の上を歩き回れるコーナーを常設してみたいという気持ちもある。また、昔と今の湿原を見比べてもらうなどの試みも大切だと思う。

ところで中貝市長には本日、現在の湿原を駆け足で視察していただいた。その御感想から伺いたい。

●中貝 まず、2万ヘクタールという空間の大きさに圧倒された。一人の人間の力ではどうにもならないという実感を持った。ただ一方でロマンも、やりがいも感じる。豊岡では水田だが、釧路では酪農。いろいろあって日本は面白い。釧路の皆さんも、自分の地域のことを一所懸命掘り下げていけば、地下水脈でつながり、我々豊岡はもちろんのこと、世界各地の人々と通じ合うことができる。

●辻井 それでは、活動報告された4人の皆さんに、現在考えていることや活動の問題点などについてお話し頂きたい。

●雑賀 組織として、どのように活動を活性化させていくかが問題だ。湿原再生の一環として清掃活動やアウトドアガイドなどを一貫してやっているが、「やちの会」としてさらにどう発展させていくか。現状では、メンバーによってトラストサルン釧路や釧路湿原川レンジャーに参加している、自由に活動している面がある。やはり「やちの会」としての一貫性を持って、より市民参加の輪を広げ、組織的に拡充していきたい。

今年は国立公園指定20周年なので、これを契機に活動の幅を広げたい。一例として、九州からの修学旅行生が湿原観察をした際「土が軟らかい、ヒザにやさしい」と言った。そのタイミングを逃さず、「君たちは100年前の落ち葉の上を歩いている。湿原ができるのに1センチで100年かかるんだよ」などの話も伝えている。「やちの会」は年間約5,000人をガイドしているが、映像など視覚に訴える手法も活用し、来訪者が自然再生に共感してくれる活動を盛り上げたいと考えている。

●杉沢 釧路の自然再生で、始まったのは公共土木事業だけ。湿地や森林をどうするかという肝心な問題は、まだ具体的に進んでいない。そこが大きな問題だと思う。



トラストサルンの森林再生活動では、環境省や市民ボランティアと連携して植林を進めているが、植えた2万本の苗木を管理し、雑草の除草を行うにも多くの労力が必要など課題が山ほどある。土砂が流出している箇所の手当もあるが、市民の力では手に余るのが実情である。現地は釧路市内から20km離れた山の中で、ヤブ蚊の大群に襲われながら頑張っている。「自然再生法」の適用は公用地に限られるため、適用外の民有地の自然再生が非常に重要。公共土木工事は止めるなどダイナミックな革命的変換も必要だ。

●針生 釧路自然保護協会では、1970年代の国定公園構想から国立公園へと経過してきて、そういう計画・構想のビジョンを持つことは本当に大切だと考えている。現状での取組みとしては、湿原東側の一区画を借りて植栽などを始めているが、悩みは会員の高齢化と人手不足である。ただ私自身が研究しているイトウは、湿原上流部で産卵し、海と往復する魚でもあり、湿原はもとより釧路川流域25万haを象徴する存在。イトウをテーマに活動を広げるのも有効かなと考えている。

●辻井 確かにイトウという存在を軸にすると、湿原だけではなく、河口から上流まで含めた「流域視点」で問題を考えることができる。示唆に富んでいるのではないか。

●川尻 地元住民にとって、釧路湿原はあまりに身近にあって広大なため、切実に「湿原を守ろう」という気持ちが起こりにくい気がする。豊岡のように「誇れるもの」があれば、住民参加活動はもっと盛り上がると思う。

●辻井 川尻さんの報告で、標茶の生徒たちが楽しくやっているのが印象に残った。勉強というのは面白くなければ長続きしないし、とかく環境問題というのは、大上段に立つと「またお説教か」という思われてしまう。どうすれば、大人も含めて楽しみながら学べるか、川尻さんどうですか。

●川尻 標茶高校の生徒も、地元なのに「川」のことを今まで実感していなかった。私が子供の頃は、学校から帰ると川に行って遊んでいたが、今の生徒たちは、他にいろいろ興味を引かれる事が多い。川の楽しさを知る人が、上手に子供たちの興味を引きつける教育手法を確立し、引っ張っていけば良い。

●辻井 中貝市長は、太陽電池やブランド米など、企業の役割が非常に重要とおっしゃっていた。

●中貝 豊岡の取組みに、コカ・コーラ(株)も協力を申し出てくれた。自動販売機と環境共生の「接点」を考えた末、太陽電池を使った自販機を思いついた。大変豪華な自販機ができ

パネルディスカッション 概要(2/2)



た(笑)。城崎温泉では、店の前にコウノトリの卵を模した募金箱を置いて、コウノトリ基金に寄付いただいている。力のあるところとは喧嘩をせず、良い方向を考え、自分たちの仲間にすべきだと思う。もちろん、国交省をはじめ国も仲間にすべき。

●辻井 針生さん、高齢化という問題も大変だが、今日はどこも同じ。環境のことをしっかり考えている若い人も多いので、いろんな人材を利用する必要ではないか。

●針生 やはりイトウからの発想が大切と思い、時々、教育大学の学生を連れて産卵河川を見せたりして、関心を高めている。しかしイトウの産卵河川は2河川しかなく、あまり人に知られたくない事情もあり、どこまで広げるべきか考えている。

また、夢を語らせてもらえば、現在はシロザケを河口で捕獲しているが、昔は屈斜路湖の湖口で獲っていた。本来の生態系を取り戻す意味で、今後は河口で捕獲しないで、捕獲場を最上流に持っていけたら良いと思う。

●辻井 静岡県のNPO「グラウンドワーク三島」に関わっているが、良い成果を上げている。もともと三島市は水の良いところで、市内を流れる川もきれいだったが、一時期相當に水質が悪化し、汚れていた。これをきれいにしようと立ち上がったNPOが、「右手にスコップ、左手に缶ビール」という楽しいキャッチフレーズで活動を盛り上げ、今では江戸時代よりも水がきれいになった。その結果、地価が上がったり、人がまちに戻ってくるなど、まさに環境が地域経済に直結している。杉沢さんは「ヤブ蚊の大群に襲われながら頑張っている」と言うが、キャッチフレーズとしては非常にまずい(笑)。

●杉沢 正直、大変です。

●辻井 だから、「大変」って言ってはダメ(笑)。

●杉沢 ヤブ蚊も多いがトンボも多いのは事実で、昆虫採集など「楽しみ」の要素を取り入れることはできる。私たちが子供の頃は、自然豊かな中小河川が遊び場だったが、今では直線化されて寄りつけない。それをもう一度、取り戻すことの大切さを子供たちに知ってほしい。また、大人にとってはやはり「経済」が大切なことで、中貝市長のお話を見習っていきたい。

針生さんがお話したように、イトウのことは本当に重要だし、サケを屈斜路湖まで遡上させたいという話は、生態系にとって非常に重要だ。以前、サケの遡上期に川の水位が上がり、サケを狙ってオジロワシが通常の10倍くらい飛來した。環境が復元されれば、貴重な生態系が戻ってくるイメージを見た思いだ。今や旭山動物園が大人気だが、残された自然是絶対に壊さないという覚悟でやれば、釧路では、本物の自然の前で楽しく学んでもらえる場ができる。そういう考え方で頑張りたい。

●辻井 「やちの会」は、今後のことをどのようにお考えか。

●雑賀 杉沢さんの発言には共感するので、「やちの会」と

してもできるだけ協力したい。私は子供の頃、標茶の片田舎に住んでいたが、サケもドンコもたくさんいた。あの頃の「ときめきを覚える川の自然」をなんとか取り戻せないかと思う。

●辻井 会員を増やす手立ては、どう考えているか。

●雑賀 今年は国立公園指定20周年なので、清掃活動の継続をはじめ、ウォーキングとか新しい参加機会を積極的に設け、広報等を通じてアピールしていく。「やちの会」の名前を見かけたら、ぜひご協力頂きたい。

●辻井 中貝市長、空想のことでも構ないので、ぜひ釧路湿原に対する提言・助言などお願いしたい。

●中貝 例えば九州石油の場合、東京本社や大分・佐賀の事業所に出かけて「コウノトリの講義」を行うなど、深いファンになっていただく努力を続けている。それと、三島の「缶ビール」のように「軽やかに楽しむ」という要素も大切なこと。豊岡でも、NPOが子供を田んぼに入れるとには必ず「食」を絡ませるなど、楽しくやるよう心がけている。さらに、「言葉を磨く」こと。話を聞くだけで釧路湿原の魅力に取り憑かれるような、その気にさせるようなしたたかさが必要である。環境のことを知ると賢くなつたような気がするもの。コンパクトかつ巧みに伝えることが重要だ。

自然体験が豊かな子供の方が倫理的にも情緒的にも安定していることが、文部科学省の調査結果で裏づけられている。豊岡では、「子どもの野生復帰大作戦」と銘打って、子供たちを山や川などの自然に触れさせ、昔のような「川ガキ」を増やそうとしている。また、大学生・大学院生の「豊岡研究」をサポートする仕組みも整備し、豊岡の知的レベルが上がったような手応えを感じている。

豊岡は、世界的冒険家・植村直己の出身地。「植村直己冒險賞」を設立し、毎年顕彰事業を行っている。ある受賞者は「最終的なゴールを考えると気が遠くなる。目前の一歩一歩の積み重ねが重要」と力説された。頂上ばかりを見つめないで、まずは「目の前の一步」。ともかく「歩み続けること」の大切さを教えてくれる貴重なメッセージだと思う。

●辻井 たいへん「したたかな話」を聞かせて頂いた。今日のお話をまとめると、以下に要約される。

1. 自然再生は「面白くなくてはダメ」である。
2. 広くいろんな人々を巻き込むべきである。
3. 「現場主義」で、みんなに体験してもらう。

ここに御出席頂いた皆さんはもちろん、本日はお越し頂けなかった月尾先生も、おそらく同じ御意見だと思う。

■お問い合わせ先：釧路湿原自然再生協議会

釧路湿原の自然再生に関する詳しい情報については、
右記ホームページをご覧ください。

運営事務局

TEL (0154) 13-1353 FAX (0154) 24-6839
<http://www.kushiro-wetland.jp/>
[E-mail] info@kushiro-wetland.jp